

信濃教育

巻頭言

郷先生

信州教育の隆盛期といわれる大正期。中核となったのは自由教育の展開であるが、その大きな原動力となったのは、長野師範附属小学校主催の県内小学校連合学会（のち連合教科研究会）である。開催の中心人物は守屋喜七。上伊那片倉村（現伊那市高遠町）生まれの守屋は、信濃哲学会創設、信濃教育会館新築など、長野県教育界に大きな功績を残した人物である。守屋は、自身の教員人生を振り返り「今迄の教育はどちらかと云ふと、都会中心の教育であった。しかしこれからは土に根を下ろした村の教育が中心となって日本教育が立ち立てられなければならないと思はれる」と言つて、村に落ちついて村に終始できなかったことを残念がっている。昭和十七年のことである。

同じ頃、諏訪の泉野村において、「農は国の本」「健全なる田舎を有する国家社会は強い」といつて藤森省吾が「泉野教育（農村教育）」を実践している。藤森の泉野教育は、子どもたちへの教育、村の青年の教育、青年教師の教育からなる、総合カリキュラムであり、現代でいうキャリア教育の先駆けのような実践である。

村に長く住み、子どもだけでなく、地域の生活に密着して生涯教育も行い、村にとけこみ、村民と共に生きる教師を「郷先生」と言う。中村一雄は著書「信州近代の教師群像」で諏訪の田舎に住んだ三人を「郷先生」として取上げている。豊平村古田分教場（現茅野市）の塚原浅茅（つかはらあさい）、豊田村有賀小学校（現諏訪市）の遊座也足（ゆざまたたる）、そして落合小学校（現富士見町）の岩本節次である。なお、塚原浅茅は久保田俊彦（島木赤彦）の父親である。中村は取上げていないが、下伊那平谷村で十五年間教鞭をとり、四十四歳という若さで生涯を閉じた林芋村も「郷先生」といつていいだろう。

信州教育は、村の教育を大事に考え、そこに暮らす教師は土と共にあった。ここに取上げた多くの先達は大きく昭和に活躍した人たちがだが、現代には通用しない考えなのであろうか。